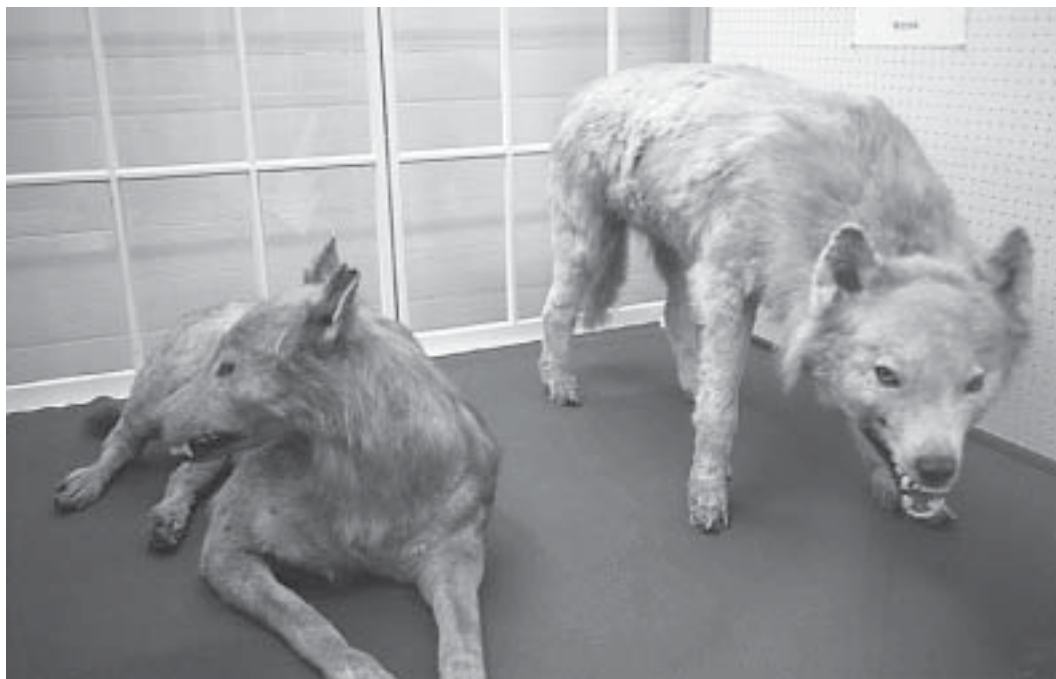




安斉真睦さんが仕留めたエゾオオカミの雄（右）と豊平で仕留められた雌（左）

昼寝エゾオオカミの最後

開拓に入ってまだ日の浅い明治10年（1877）、（北海道大学附属植物園内博物館の説明板では12年8月）武田清寧さんの妻が近くの義弟の家へ行くため横丁付近（現在の中央1条3丁目3番39号池田食品（株）付近）にさしかかったところ、寝ているエゾオオカミに出くわし、あわてて家に駆け戻った。

当時、道路といっても人が通れる程度の細道で、開拓された耕地を除くと大部分は原始林や湿地に覆われ、エゾシカやエゾオオカミ、熊などが出没する野生動物が主役の土地だった。

このエゾオオカミは近くの安斉真睦さんが間もなく武田清寧さん所有の火縄銃で苦心の末に撃ち取り、それから120年経った今も北大植物園の博物館に、世界でただ1頭の貴重なエゾオオカミの剥製標本として展示されている。また火縄銃は北海道開拓記念館に保存されている。

エドウィン・ダン^{けもの}の話によると、エゾオオカミは手に負えない獣ではあるが、獲物がある限り、人に危害を加えることはなかったという。

冬は豊富なエゾシカを襲った。犬の3倍はある大きな足のおかげで、深い雪でも速く走ることができたので、エゾ

シカを確実に仕留めた。

エゾシカは群をなして無数にいた。肥えた土地は畑に変わり、そこに育つ作物はエゾシカにとっては魅力的だった。開拓者にとって害獣となったエゾシカは積極的に駆除され、次第に減っていった。さらに明治12年の記録的な大雪で餌の笹が大雪の下に埋まったために、道内各地で大量に餓死し、エゾシカは激減した。

エゾシカを主な餌にしていたエゾオオカミは餌がなくなったために飼われている馬を襲い、馬を生産する速度を上回ってむさぼり食った。

生産者はオオカミの害にたまりかねて猛毒のストリキニーネ^{けもの}を買い集め、毒入りの肉の塊をあちこちに置いた。殺された馬にも毒をかけた。オオカミは生肉の誘惑に抵抗できず、ストリキニーネの臭気にもかかわらず、食べて次々と死んでいった。キツネ、カラス、野良犬もこの肉を食べて死んだが、当時としてはやむを得ないことだった。

こうしてエゾオオカミは明治22年ころまでには絶滅した。激減したエゾシカは保護の成果があがって次第に増えていった。

ヒグマ、エゾオオカミの恐怖と 闘って続けた開拓

